

「日本荘園データベース」への招待

福 田 豊 彦

-
- | | |
|-----------------|-----------------|
| はじめに | 2. 『荘園DB』の内容と機能 |
| 1. 作成の目的, 方法と経過 | 結びに代えて |
-

論文要旨

「日本荘園データベース」は、日本全国の「荘園」に関する主要な情報を集成し、コンピュータを使って、短時間の検索表示を実現しようとするものである。対象とする「荘園」には、庄・園・厨・牧・保・別符などを含み、時代としても中世の荘園に限らない。また収載する「主要な情報」は、国名・郡名・主要史料出典・史料初見年・比定地など19項目である。作成の方法は、まずパソコン上で動く『荘園DB』としてデータを集積し、一括して歴博のホストコンピュータに送り、「日本荘園データベース」として公開するが、完成後は電話回線を通じて検索の需要に応じ、また展示などにも利用する予定である。その作成作業は1987年に開始、1990年度に『荘園DB』の入力を一応完成、現在は試用しながら修正を加えており、1993年度には完成する予定である。収録「荘園」の総数は現在7947で、1993年の完成時点には8500荘に及ぶと予想される。ちなみに、清水正健編『荘園志料』の収録数は5823である。

はじめに

冒頭から私事に亘り恐縮であるが、私は1987年に国立歴史民俗博物館のお世話になり、最初に情報委員を命じられた。前職の東京工業大学でもワープロは使っていたが、コンピュータによる歴史情報の整理などという高級なことは全く知らなかった。しかし歴博では、設立の当初から歴史研究におけるコンピュータ利用の将来性を見通し、データベースを作成して公開しようとする計画を援助し促進していることを知った。旧高旧領取調帳など、現在「歴博公開データベース」として公開されている4つのデータベースは、いずれもかなり早くから取り組まれていたもので、私が情報委員に任命された頃から公開への具体的作業に着手した。しかし館蔵資料データベースをはじめ、開館当初から手を付けられていたものの幾つかは、とても公開には耐えないものであり、刊行物をそのまま入力したようなものもあって、先の見通しは明るいとはいえなかった。このため歴史研究部では、論議の結果、記録類の全文入力への試行と、日本荘園データベースの作成に取り組むこととなり、後者は私が担当して計画を進めた。

この報告は、このようにして始められた「日本荘園データベース」作成作業の現状と今後の計画を記し、歴博における歴史史料のデータベース化の課題の一端を考えようとするところにある。もとより歴史研究にコンピュータを利用しようとする試みは、全国的にも手を染められたばかりの作業であり、ここには歴史学の方法とは対極的な「標準化」の問題もあって、同質性を前提とした数量的把握にとともなる限界は多い。しかしそうした限界を心得ていれば、コンピュータの利用度は将来かなり広がるであろう。この荘園データベース作成作業も、初めての試みとして試行錯誤の連続であったし、機器の質の向上とともに、今後改良を要する点はいつでも多くなるであろう。そうしたことを考慮しながらも、まずは作成過程の報告として紙面をお借りすることとした。

1. 作成の目的、方法と経過

このデータベースは、日本全国の「荘園」に関する主要な情報を整理・収録し、コンピュータを利用して、短時間に検索・表示を行えるようにしようとするものである。この研究の最終的な目的は、それを歴博のホストコンピュータで動くシステムに組み込み、「歴博公開データベース」のひとつとすることにあるが、その基本となるデータは、修正増補の容易なパソコン上で作成することが妥当であると判断された。現在私の手元にあるものは、このパソコン上で動くデータベースであり、以後このパソコンデータベースを『荘園DB』と呼ぶが、私の守備範囲もほとんどここに限られるわけである。なお、このデータベースで対象としている「荘園」

には、庄・園・御厨・牧のみではなく、国衙領の保・別符を含んでおり、本稿ではこれを「荘園」と表示することにする。

清水正健氏が作成された『荘園志料』は、5,800余に及ぶ荘園牧保を国ごとに整理して主要な史料を掲げ、その所在を当時の村字名に比定し、初見年代や荘園領主・田数などの荘園に関する基礎的事項を記載しており、上下巻2,350頁を超す大部の書物であるが、中世史研究者の座右の書とされている。竹内理三氏の『荘園分布図』もほぼ同書によったものであり、今日でも荘園研究の手引書という生命を失ってはいない。しかし同書は昭和初期に刊行された書であり、その比定地名は同書例言にみえるように、原則として明治29年以前に遡るものであるし、その後に発見された史料によって、増補修正を必要とされている記述も少なくはない。この「日本荘園データベース」は、まず清水氏の『荘園志料』から必要な情報を切り出し、『平安遺文』『鎌倉遺文』などによって、これを補充・修正するという方法をとる。

また現地比定に関しては、幸い角川書店と平凡社から相次いで地名辞書が刊行されているので、比較的容易に現在の市町村に比定できるようになっている。もとより「荘園」には、島津庄のように3カ国に及ぶ大荘園からひとつの字にも及ばない小規模なものまであり、集約的な一円荘もあれば散在耕地よりなる分散的荘園もあって、現在の市町村への比定は意味がないともいえよう。しかしこの「日本荘園データベース」には、近未来の計画として、大略の位置を地図上に示す試みをもっており、あえてひとつの市町村を「参考市町村」としてあげることにした。ここでは、例えば島津庄は鹿児島市として特定しており、その荘域が他の市町村には及んでいないとか、市町村の全域はその庄に属するなどという意味ではなく、あくまでも参考となる市町村名を示すに過ぎない。

『荘園DB』の作成手順を記すと以下のようなになる。もとよりこれはモデル的な手順であり、現実には必ずこの順序に従ってひとつずつ作業を進めているわけではなく、時には並列的に作業し、都合によっては順序を逆転させた場合などもあった。

- ① 『荘園志料』に収録された「荘園」について、そこに記された「荘園領主」「史料出典」「初見年(和暦・西暦年)」「引用史料にみえる村郷名」「比定地の村字名」などの情報を切り出し、これを『荘園DB』の情報として収録する。この際すべての「荘園」に固有のコード番号が付けられるが、異称のある荘園や本庄と新庄の別のある荘園などは重複して登録され、そのコード番号が重複コードとして記入される。……作業①
- ② 『平安遺文』『鎌倉遺文』などに収録された文書のうち、個別荘園に関する史料を選んでカード化し、その文書番号(遺文番号と呼称)を入力する。この過程では、初見年号をはじめ、①の作業で入力されている諸事項は個々に修正されるし、増補される「荘園」もでてくる。増補史料としては、竹内理三氏が編集された『平安遺文(含、金石文編など)』『鎌倉遺文』が主要なものであるが、『寧楽遺文』『大日本古文書編年文書(主に正倉院文書)』

および関秀夫氏編の『経塚遺文』に収録された個別荘園関係史料も、一応カード化の対象とした。……作業②

③ ①②によって把握された各「荘園」について、『日本地名大辞典(角川書店刊)』や『日本歴史地名大系(平凡社刊)』などによってその比定地を調べ、参考市町村をきめてその市町村コードとともに記入する。……作業③

④ 以上のようにして収録された各「荘園」に関する情報を、点検し修正する。この修正作業は、歴博でのデスクワークとしての修正と、府県単位で行われる第2段階との、2つの段階で行われる。前者は体裁の統一をはかりながら行う微修正であるが、後者は地元にいる研究者に依頼して実施される。……作業④ノ1)・④ノ2)

⑤ 別に、荘園に関する研究論文目録を作成してパソコンデータベースとし、コード番号を媒介として、両者を容易に参照できるようにする(以下これを『荘園論文DB』と呼称する)。……作業⑤

⑥ パソコン上で作られた『荘園DB』をもとに、歴博公開データベースとなるようなシステムを開発し、或いはまた、展示などに利用する方法などを検討する。ここでは、『荘園DB』と比較してどのような機能を付加できるかは未定であるが、検索結果の地図上への表示などを実現したいと考えている。……作業⑥

以上の6段階の作業手順は、1987年度の試行の当初から明確であったとはいえないが、その翌年からは年度計画に従って作業し、昨年度までに①～③の作業を大略終了、現在は主に④ノ1)の作業を行っている。また⑤に関しては、小島道裕氏が昨年度から作業を進めている。

各年度ごとに行った主要な作業を以下に列挙しておこう。

1987年度(試行年)

『荘園志料』の関東10カ国(関東8カ国と伊豆・甲斐)を選び、その10カ国分について試験的に作成することとし、その分の『荘園志料』の必要な情報に線引して入力した。まだパソコン上のアスキーファイル形式のデータの羅列であったが、項目としては「コード番号」「国名」「郡名」「荘園名」「重複コード」「明治期の比定地名」「史料村郷名」「領家本家」「史料出典」の7項目を設定していた。現在より項目数も少なかったが、全国的な荘園コード番号の付け方などはこの段階に決定した。現実の史料では種々の文字表現をとる同一の「荘園」を重複コードによってつなげようとする試みは、この「荘園データベース」独自の発想であるが、それもこの最初の段階から試みた。なお、この『荘園志料』収録情報の線引と入力データの校正作業は海津一朗氏に依頼したが、統一性を保つためにこの作業は、以後も同氏にお引き受けいただくことになった。

1988年度(初年度)

① 前年度の成果をもとに、関心のある館内の古代中世史および情報部門の関係者が協議し

て収録する項目を決め、また『荘園DB』を市販のデータベースソフトである dBASEⅢの上で作ることとして、カンテック社に依頼し、0 SYOUEN, PRG (VER. 1) を作成した。なおこの段階で、収録内容として「ふりがな」「参考市町村」「市町村コード」などの項目を付加し、「記録類」を別立てすることになり、現在の『荘園DB』の基本的内容が決定された。

② 『平安遺文』および『鎌倉遺文』1～20巻の分のカードを作成した。この作業は学習院大学大学院生の海老名尚・小笠原隆一・高橋秀和の3氏に依頼したが、以後この作業も3氏に継続してお願いすることになった。

③ 『荘園志料』下巻の内の残りの諸国(中国遠国36カ国)に関する必要情報の線引と入力。
1989年度(第2年度)

① 館内外の研究者15名による歴博共同研究「日本荘園データベース作成の基礎的研究」が発足。日本荘園データベース作成の基本方針を検討し、『荘園DB』の基本的な収録内容、年次計画などを決定して、計画の全貌が明確になった。

② 『鎌倉遺文』20～30巻分の荘園カードの作成。

③ 『荘園志料』上巻分の内、畿内5カ国を除く近国17カ国分の必要情報の線引とその入力。

④ 『平安遺文』『鎌倉遺文』の荘園カードを整理して必要な情報を記入した修正用紙を作成する作業に着手した。またこの作業と並行して、地名辞典による参考市町村を選定、その結果も修正用紙に記入することとし、中国遠国分からその作業を始めた。始めてみるとこの作業は、予想以上に肉体的にも大変な作業であり、またのめり込むときりがなく、時間切れになるという厄介な仕事であった。ここでは特に、当時東大史学科の学生であった吉田賢二氏に多くの負担をかけ、翌年分を加えると、全国のほぼ半分の作業を同氏にお願いすることになった。

⑤ 前年度までに入力した『荘園志料』の中国遠国47カ国分のデータに、④の結果を付加。ここで下巻分の基礎入力が完了したことになる。

⑥ ①の検討結果をもとに、0 SYOUEN, PRG の一部を手直しするとともに、東国14カ国分のデータをつなげて、ハードディスク上で動くようにした。

1990年度(第3年度)

① 『荘園志料』畿内5カ国分の入力。

② 近国17カ国分と畿内5カ国分の『平安遺文』『鎌倉遺文』による修正データ、および「参考市町村」情報の整理と入力。

③ 共同研究メンバーによる10カ国分の修正作業(作業④ノ2))の実施と、それによるデータの修正入力。共同研究の諸氏には大変な労働を強いたが、この作業によって、府県別修正の必要性と大まかな所要時間を把握できた。

- ④ 小島氏による『莊園論文DB』の作成(作業⑤)。そのデータの収集とシステムの作成。
- ⑤ 遠国・中国分の入力情報の校正作業。

以上のようにして、「日本莊園データベース」の基礎データとなる『莊園DB』作成の第1段階を終えたが、今後の作業計画についても簡単に記しておこう。

1991年度

- ① 畿内近国分の入力情報の校正作業。
- ② 体裁の統一など、『莊園論文DB』の全体的な補充修正作業(作業④ノ1)。
- ③ 歴博公開データベースのためのシステムの内容の検討、およびその作成。
- ④ 平成5年3月に計画されている企画展「莊園絵図展(仮称)」における公開方法の検討。
- ⑤ 「日本莊園データベース」に関するその他の利用方法の検討。

1992年度

- ① 『鎌倉遺文』30～42巻分の莊園カードの作成。
- ② 府県別のデータ修正の依頼と実施。約30府県の予定。
- ③ ①②による修正データの入力。

以上で「日本莊園データベース」は一応完成し、残されている歴博の基本的仕事は、微修正を含む恒常的維持管理の問題となるはずであるが、『鎌倉遺文』の刊行状況などからみて、最後の③の作業の完成は、1993年度にずれ込むことも予測される。

未来の問題はさておき、現在私の手元にある『莊園DB』の内容について、項を改めて説明することにしよう。

しかしその問題に入る前に、使用文字について一言しておきたい。コンピュータを使って文字を検索する場合、種々の異体字は統一しておいた方が便利であるが、特に電話回線を使用して行う公開データベースの場合には、外字の使用は絶対に避けなければならない。このために歴博では、ホストコンピュータでの外字使用は行わないことを基本的な方針としており、日本工業規格として定められた第1・第2水準にない漢字は、異体字や借字によってそこにある漢字に変換し、やむを得ない場合には「かな」を使うことになっている。「日本莊園データベース」も基本的にはこの方針に従い、使用漢字は適当な常用漢字に置き換え、莊園名なども第1・第2水準の漢字に転換している。例えば阿氏河庄を阿豆河庄としたことなどもそのためである。しかしパソコンでは外字の使用もさして困難ではなく、また莊園名には「ふりがな」があるので事更に「かな」を使う必要はないと考えて、『莊園DB』では幾つかの外字を作成している。これがホストに移されて公開データベースとなり、また他のパソコンで受信される場合には、**ニ**(ゲタ)として表示されることになるであろう。

歴博ではまだ異体字の標準化のための基準は定められていないので、ここでも積極的な統一ははかっていないが、検索事例が多いであろうことを考慮して、莊園名として使う際には、庄

(荘は使わない)・園(蘭は使わない)・御厨(単に厨や廚とはしない)・別符(別府とはしない)に統一している。なお、パソコン上で動く『荘園DB (0 SYOUEN. PRG)』では、部分一致の検索が行われるため、備考欄に記された字句も含めて、かなり自由な検索が可能であるが、電話回線を使用する公開の段階でどのような検索ができるかには、不明な点もある。

2. 『荘園DB』の内容と機能

『荘園DB』に収録されているデータは次の19項目で、文字としてはカタカナと数字に限られる半角項目(1文字1バイト)と、全角文字を使用する項目(1文字2バイト)とがある。いずれにせよ指定した文字数以上に入れることはできない。検討の過程では、これによって生ずる蒐集史料の切り捨てを避け、別の方法で保持することも考えたが、画面表示や検索時間などに技術的困難が生ずるため、それは将来の課題として今回は見送ることとした。なお、現実にもそうした蒐集史料の一部切り捨てがおきた「荘園」は、全体の中では2%以下の少数であり、またその多くは研究論文なども多い個性的な有名荘園であって、このデータベースが目的とした数量的把握には不向きとみることもできる。またパソコン上では、項目の変更や使用文字数(バイト数)の増加などを行うことも、手なれた人にはさして困難な作業ではない。

19の各項目別に、割り当てた文字数と内容を簡単に解説しておこう。

〔荘園コード〕(7バイト); 7桁の数字で表現。

構成は国毎の固有番号=2桁、郡番号=2桁(郡名不詳は99)、荘園番号=3桁よりなる。

〔国名〕(4バイト); 漢字2字。

〔郡名〕(4バイト); 漢字2字。『荘園志料』を基準とするが、その後の研究によって改めたものも少なくない。(このため、荘園コードの郡番号には、郡の固有番号とズレを生じた場合もある。)

〔荘園名〕(14バイト); 漢字7字以内。庄号のあるもののみでなく、園・御厨・牧・保・別符を含む。

〔ふりがな〕(12バイト); 半角のカタカナ12字以内。現代仮名遣による。『荘園志料』に振仮名のあるものはそれを現代仮名遣に改めたが、地名辞典などにより訂正したものも少なくない。地名の読みには、濁点の有無なども含めて困難な問題が多いので、当初は付けないつもりであったが、検討の結果、索引作成などのために追加することになった。

〔初見年、和暦〕(14バイト); 史料上の初見年、漢字7字以内。

〔初見年、西暦〕(4バイト); 史料上の初見年、4桁の半角数字。(8世紀以前は第1桁に0をつける)。

共に立券年ではなく、初見史料の年代を示す。史料上で立券年が判明する場合には、備考欄

などに記入する。なお、西暦年を入れた理由のひとつは、検索の際に特定世紀など、時代範囲の限定をできるようにするためである。ここでは『延喜式』は延長5年(0927)、『神鳳鈔』は延文5年(1360)のように、著作物は原則として刊行年とする。

[重複コード](27バイト); 例えば下総国夏美御厨は船橋御厨とも呼ばれたように、同一の「荘園」であっても別の呼称があったり、ひとつの荘園が本庄・新庄に分かれたり、また東西南北に分離したような場合には、同じ「荘園」が重複して収録されることになる。そうした場合には、相互に重複コードを付けてコード番号を記入し、参照の便宜をはかった。検索の際には、念のためその番号の「荘園」も検討されたい。これによって、「荘園」は原則として異称でも検索できることになったが、例えば太田庄と大田庄、川口庄と河口庄のように、太と大、川と河の文字は、史料上に互用例が多くて煩雑になるために省略した。検索に際しては両方をご覧いただきたい。

なお、このように同一荘園が何か所かに記録されている場合、1枚のカードを基本としてそこに記述を集中し、他のカードの記述は名称や初見年などに限定した。しかしコード番号を別にすると、検索結果を数量として把握する際には、重複して数えられることになる。そこで、基本カードを簡単に見分けて重複を避けられるようにするために、参考市町村の記載は基本のカードに限定することにした。

[研究論文](1バイト); 有または無。『荘園論文データベース』に登録された個別荘園研究論文の有無を示す。

[参考市町村](20バイト); 漢字10字以内。

その荘園の所在に関係のある現在の市町村名ひとつを挙げる。前述のように、「荘園」がその市町村の内であったとか、同市町村がその荘園の中心であった、というようなことを保証するものではない。

[町村コード](6バイト); 6桁の半角数字。

上記参考市町村の自治庁で定めた市町村コード番号(現実には5桁で表現できる)。

[明治村字名](762バイト); 漢字370字。

『荘園志料』があげる村・字の名称。これは清水正健氏が特に苦勞されたもので、その「例言」によると、地名は明治29年より前のものであるが、現在の小字名に一致するものも多く、「荘園」の範囲を探る資料となる。『旧高旧領取調帳』は本館の公開データベースのひとつであるが、その地名との関係は特に密接である。歴博データベースを相互に結び付ける鍵になるような将来の可能性をも考慮し、項目中で最大量を割り当てた。

[史料村郷名](254バイト); 漢字125文字。

史料にみえる当時の村郷名を記す。史料に郷名のあるものには「郷」を付けるが、国衙領の郷の意味ではない(「村」の字は省略)。

[領家・本家] (100バイト); 漢字50字以内。

荘園領主である領家職・本家職の所有者を記載。院領や勅旨田などには別に「皇室領」の文字を、近衛家領や九条家領のような摂関家領には別に「摂関家領」の字句を記入して、検索の便をはかった。なお、皇太神宮領は「伊勢神宮領」とし、内外の別がわかるものは「内宮領」「外宮領」、二宮領にはその双方を記入した。また叡山関係の所領には「山門領」、金剛峯寺領には「高野山領」と記した。また預所職や地頭職などであっても、寺社や貴族が所有しており、この欄に記入しておくとう便利と思われたものには、ここに入れて()内にその職名を付記した場合もある。

[出典] (150バイト); 文書の出典を75字以内の漢字で記載。

[遺文番号] (150バイト); 半角文字150字。

『平安遺文』『鎌倉遺文』等の文書番号を記入する。ここでは『平安遺文』一一二五号・三四四五号の文書は、「へ1125・へ3465」のように表示するが、『寧楽遺文』は上巻の頁数を記し、『大日本古文書編年文書』は巻数と頁数によって「シ2-115」のように表現する。ここでは文書はすべて半角のカタカナと数字で示されるが、その略号は次の通り。

シ … 『正倉院文書』(『大日本古文書編年文書』) … (巻数一頁数)

ナラ … 『寧楽遺文』 … (上巻頁数)

へ … 『平安遺文』 … (文書番号)

へホ … 『平安遺文, 補遺編』 … (同上)

へキ … 『平安遺文, 金石文編』 … (同上)

へタ … 『平安遺文, 題跋編』 … (同上)

カ … 『鎌倉遺文』 … (文書番号)

ナン … 『南北朝遺文』 … (文書番号)

キヨ … 『経塚遺文』 … (文書番号)

なお『荘園DB』では、バイト数が許す限り、『鎌倉遺文』までは全体をカバーしたいと考えているが、南北朝遺文にはその予定はない。

[記録類] (150バイト); 漢字75字以内。

日記とその年, 月, 日(元号使用)を表示。

なお『吾妻鏡』は、『東鑑』と記す。

[地名辞典] (150バイト); 漢字75字以内。

『日本地名大辞典(角川書店)』または『日本歴史地名大系(平凡社)』によって荘園の立地条件などを記入する。『荘園志料』との記述にズレのあるものもここに注記した。

また『荘園志料』に記載のない新出荘園には「荘園志料=なし」, 『荘園志料』にはあるが引用史料のない荘園は、「荘園志料=記事なし」または「荘園志料=史料なし」と注記した。後

* 日本荘園データ一覧 *

荘園コード：3203005 国名：出羽国 郡名：村山郡 研究論文：
荘園名 ：寒河江庄 ふりがな：サカエ
重複コード：
初見年 ：天仁三年 (1110) 町村コード：0620
参考市町村：寒河江市

『明治村字名』
寒河江荘・寒河江・吉田・窪野目

『史料村郷名』
吉田郷・堀口郷・三曹司郷・西所郷・窪目郷＝円覚寺領＝北方・南方・慈恩寺

『領家・本家』
藤原忠実領・近衛家領・京極家領・摂関家領・円覚寺領

『出典』
近衛家領目録・近衛家文書・前田家所蔵文書・瑞泉寺文書・円覚寺文書

『遺文番号』
カ18759

『記録類』
『殿暦』天仁2, 9, 6 (寒河江)・3, 3, 27 (-庄)

『地名辞典』
角川地名＝村山地方、現寒河江市、川北町の一部および山間部の西川町、大江町＝(天仁3) 忠実の荘園に出羽守源光國が乱入、白河院に訴え、家使を派遣＝貢馬あり

『備考』
南方地頭職＝大江親広→大江氏・北方地頭職＝北条氏→(永仁3) 時宗後家禰音院が工藤刑部左衛門入道知行分を円覚寺仏日庵に寄進＝吉田、堀口、三曹司、両所、窪目の5郷・『殿暦』2, 9, 6に「寒河江黒栗毛余馬」＝貢馬か

図1 『荘園DB』の内容 (出羽国寒河江庄)

者は近世地名としての荘名であって、中世に存在したという証拠はないものであるが、なかにはその後の史料によって、中世に遡って、存在を確認できた「荘園」もある。

[備考] (254バイト)；漢字125字以内。

注記しておきたい事項を記す。立荘の時期やその事情、田数などは、[地名辞書]の欄かこの欄に記載した。字数制限が厳しいために必ずというわけではないが、地頭名などを記した場合もある。なお、重複コードがあって、内容を記入した基本カードが別にある場合には、「→」としてその荘園コード番号と荘園名を記し、また同じ名称で異なる近隣の荘園や参考にすべき荘園には、「→コード「荘園名」参考」などと注記した(なお、伝領関係を簡単に示すために→の符号を使用した場合もある)。

以上19項目のデータは、パソコンの画面では3面にわたっているが、通常のパソコンプリンターで印刷すれば、1「荘園」分はA4版の用紙1枚に収容される(図1)。

現在のところ『荘園DB』は、前述のように全国の入力を一応終えて修正の段階に入っているが、ここに収録されている「荘園」の数を表1に掲げる。参考までに『荘園志料』の欄を設けたが、『荘園DB』に収録した「荘園」総数7,987は、『荘園志料』の「荘園」数より36%以

上も増加したことになる。この中には前述の船橋御厨のように、『荘園志料』では別立していない荘園の異称が別に数えられた場合もあるが、新出史料の出現による増加が多く、『荘園志料』以後の歴史研究の進歩の反映ということもできよう。『鎌倉遺文』の全巻が収録される完成時には恐らく8,500を超え、『荘園志料』収録数の5割増になるものと推察される。国毎にみてもこの「荘園」数は、甲斐国を除くすべての国で増加している（『荘園志料』の甲斐には「筋」という近世の行政区画11を載せているが、『荘園DB』にこれを収録しなかったためである）。

なお、『荘園DB』のデータは、全体ではかなり大きい（約18メガ）。フロッピーでは伊勢・大和・近江は1カ国で4枚を占め、通常でも1枚に1～2国しか入れることができない。このために歴博では、ハードディスクに収載してそれを基本としているが、それでも全国をまとめて扱うことは、検索所要時間などの点で妥当ではない。現状は表1にみられるように、全国を8地方に区分しており、別に主要データを切り出した全国版を作成する予定である。この地方区分が、使用上の便宜からみて妥当か否かは種々の異見が予想されるので、近く行われる共同研究で検討する。

表1には「荘園」をその名称によって、庄・園・御厨・牧、および国衙領の荘園化ともいうべき保・別符に分類し、その数をあげた。このような分類はコンピュータの最も得意とする分野であるが、庄の比率の高い畿内（93%）、牧の構成率の高い東国（9%）など、地域毎・国毎の大局的な性格をここに認めることができよう。777という国別最大の「荘園」数をもつ伊勢国の庄は81（構成率10%）に過ぎず、次に「荘園数」の多い大和（庄構成率96%）と対極的であるが、ここでは88%が伊勢神宮の御厨と御園で占められており、伊勢・志摩両国の地域的特性をみてとれよう。もちろん御厨は伊勢神宮領に限られるものではなく、近江などには官衙の厨もあるが、数として多いものは神宮の御厨であって、それが西日本より東日本に集中しているという傾向性も数的に確認できる。備考欄に記したように、郡院として国衙領の一種である「院」も各地に認められるが、構成率としてみるとやはり薩隅日3国は特殊である。同様に国衙領の一形態である保・符のあり方も興味深く、その比率の高い諸国を挙げると、9割を超える佐渡を筆頭に、北陸・山陰地方に比較的濃厚である。その点では島国＝山国に保が成立しやすかったようにも思えるが、ここでは太田文の残存のような史料残存の偶然性も考慮せねばなるまい。

『荘園DB』の操作には、わかりやすいマニュアルが作られており、d BASEIIIのソフトと0 SYOUEN. PRG さえあれば、収録データの修正・追加・印刷などは誰にでも簡単にできる（d BASEIIIではワープロ辞書類は自由に組み込むようになっている）。そこでそれらのことは省略し、このデータベース作成の最大の目的であった検索について、具体的事例によってその大要を紹介しよう。

表1 『荘園DB』収録荘園の現状

(1991, 6現在)

	国名	日本荘園データベース								荘園志料
		総数	庄	園	厨	牧	保符	他	備考	収録荘園
東 国	遠江	80	48	4	23	3	2			59
	駿河	65	44	1	12	5	3			58
	甲斐	50	37	0	1	9	3			50
	伊豆	26	16	6	3	0	1			24
	相模	49	41	1	1	2	3	1	他=社	35
	武蔵	164	135	0	8	10	11			136
	安房	15	5	0	4	3	3			9
	上総	35	25	1	1	3	6			24
	下総	61	41	0	10	8	1			44
	常陸	59	46	0	1	2	10			46
	信濃	123	69	0	16	36	1	1	他=勅旨	90
	上野	58	31	0	10	10	7			36
	下野	42	29	0	5	2	6			24
	陸奥	76	61	0	0	2	13			56
17 国	出羽	33	33	0	0	0	0			26
	越後	93	70	0	1	0	22			66
	佐渡	23	1	0	0	0	22			20
	小計	1,052	732	13	96	95	114	2		803
北 陸	近江	461	359	9	16	6	53	18	杣2勅旨2位田2	322
	美濃	171	146	1	9	3	10	2	他=勅旨・院	133
	飛驒	6	2	0	1	0	3	0		3
	若狭	68	43	0	1	0	23	1	他=加納	45
	越前	175	132	0	4	0	36	3	他=勅旨2・別所	129
	加賀	99	59	0	1	0	39	0		82
	能登	83	29	0	4	0	39	11	他=院9・開発2	68
	越中	99	61	0	5	0	32	1		71
	小計	1,162	831	10	41	9	235	36		853
東 海 5 国	伊賀	103	61	3	6	1	11	21	杣13出作4神戸2	59
	伊勢	777	81	335	346	2	6	7	他=神戸4・神田1	712
	志摩	74	5	12	56	0	1	0		64
	尾張	238	141	22	41	0	33	1	他=勅旨	202
	三河	113	70	21	18	0	4	0		97
	小計	1,305	358	393	467	3	55	29		1,134
畿 内 5 国	山城	219	191	11	1	3	7	6	他=杣3・封戸・院	142
	大和	735	706	7	0	8	3	11	杣4・院3・神戸他	354
	河内	183	155	9	2	11	3	3	他=勅旨・杣・山	134
	和泉	82	70	2	2	0	6	2	他=勅旨・領	57
	摂津	284	253	4	6	16	4	1	他=御領	184
	小計	1,503	1,375	33	11	38	23	23		871

	国名	日本荘園データベース								荘園志料
		総数	庄	園	厨	牧	保符	他	備考	収録荘園
山陰 8国	丹波	180	148	2	2	4	20	4	他=杣4	134
	丹後	138	41	0	4	0	92	1	他=勅旨	127
	但馬	114	103	1	2	0	7	1	他=勅旨	92
	因幡	83	23	0	0	0	60	0		74
	伯耆	65	54	0	5	4	2	0		50
	出雲	103	78	0	1	0	24	0		48
	石見	46	23	0	0	0	21	2	他=領	26
	隠岐	9	4	0	0	2	2	1	他=院	6
	小計	738	474	3	14	10	228	9		557
山陽 8国	播磨	262	211	1	5	1	41	3	他=勅旨1	206
	美作	112	93	0	0	0	18	1	他=杣	88
	備前	125	89	0	1	2	33	0		94
	備中	96	83	0	1	0	12	0		65
	備後	88	78	0	0	0	9	1	他=勅旨	63
	安芸	88	70	0	0	0	17	1	他=勅旨	60
	周防	114	54	0	4	3	45	8	他=令6・郡・関	90
	長門	37	24	0	1	2	9	1	他=領	31
	小計	922	702	1	12	8	184	15		697
南海 6国	紀伊	273	257	6	2	0	6	2	他=院2	186
	淡路	41	32	0	0	0	9	0		32
	阿波	94	82	0	1	0	10	1	他=別宮	66
	讃岐	67	57	0	1	1	6	2	他=勅旨2	50
	伊豫	51	33	0	3	1	10	4	他=出作2・勅旨1	36
	土佐	59	48	1	0	1	6	3	他=杣3	44
	小計	585	509	7	7	3	47	12		414
西海 11国	筑前	100	84	3	1	1	9	2	他=領・院	65
	筑後	73	64	3	0	0	6	0		59
	杵岐	3	0	0	0	1	2	0		2
	対馬	0	0	0	0	0	0	0		0
	豊前	93	76	0	0	0	16	1	他=杣	76
	豊後	78	62	2	0	0	9	5	他=院2	53
	肥前	107	80	8	1	6	10	2	他=別所・院	66
	肥後	115	96	4	0	3	11	1	他=領	79
	日向	60	25	0	0	5	17	13	他=院13	56
	大隅	25	5	6	0	0	1	13	他=院12	17
	薩摩	26	11	1	0	0	2	12	他=院12	21
小計	680	503	27	2	16	83	49		494	
	総計	7,947	5,484	487	650	182	969	175		5,823

〔課題Ⅰ〕 11・12世紀初見の陸奥出羽両国の撰関家領の庄を検索する。

図2は以下の各場面での画面をコピーしたものである。

- ① 最初の〔MENU〕画面から〔3〕の検索・編集を選択すると、検索項目の選択場面が現われる。
- ② 上の項目名から必要な項目を選択してその番号を入力し、史料初見年の年代を限定したい場合には、西暦年でそれを特定する。この場合、選択項目は「国名」「荘園名」「領家・本家」を選び、時代範囲は「1001～1200」に限定した。
- ③ 〔*〕を入力して確認すると、即座に③の画面が現れる。ここで指定する文字列を入力するが、指定単語は合計5個以下に限定されている。例えば、特定の国の「荘園」を一度に4荘検索することもできる。また選択は、同一項目の中では(OR)、他の項目の間では(AND)の関係である。この場合には、「国名」の項目に、「陸奥、出羽」、「荘園名」に「庄」、「領家・本家」に「撰関」と入力すればよい。
- ④ 所要時間約40秒で④のような選択結果が表示された。この場合は10例が検出されたが、重複コードの欄をみると屋代庄が重複しており、これを除く荘園数は9庄である。(現在『荘園DB』が入っているハードディスクは緑電子のPOKEDY-RE-C4(40メガ)で、所要時間はこれによる。パソコンはNEC-PC9801F2と同VM23を使っているが、検索スピードには顕著な差は認められない。)
- ⑤ 検出されたこれらの「荘園」について、個々に修正したり内容を知りたいような場合には、その先に進む。そこには、〔1〕修正(検出された「荘園」を1つずつ呼び出し、修正したり印刷したりする、図1のような画面があらわれる)・〔2〕ファイル(新しいファイルを作る)・〔3〕ブルーフ印刷(検索対象すべてを印刷する、この場合には10庄分のカードをA4版の用紙10枚に印刷)・〔4〕必要情報画面(パソコンの画面に、荘園コード、国名、郡名、荘園名、同フリガナ、重複コード、初見年(和歴・西暦)、参考市町村、同コード番号、領家・本家など11項目の主要な情報を、1画面に3庄ずつ表示)・〔5〕必要情報印刷(同前のプリントアウト、A4版に7庄ずつ印刷)、という5つの選択項目が用意されており、適宜に番号を入力して選択することができる。

〔課題Ⅱ〕 『荘園DB』に収録された「庄」について、史料初見の世紀別に分類する。

操作は〔課題Ⅰ〕と同様の繰り返しであるから、ここでは結果を表にして掲げるとどめるが、参考までに前掲表1の国別の「庄」の総数を最初の列にあげておいた。この数は世紀別荘園数の合計とかなりの隔りがあるが、それは、近世地名としての「庄」と、本庄・新庄や東西南北などに分かれた「荘園」を差し引いたためである。表は、「東国」17カ国と「北陸」8カ国という、全体としてはわずかな部分に過ぎないが、読者諸氏には、この表を一見すれば歴史的に意味のある種々の問題を思いつかれるであろう。ごく荒っぽくみても、1) この「北陸」

MENU

平成03年07月04日 日本在園 M E N U
 [1] : データ入力処理・登録
 [2] : 修正
 [3] : 検索・編集
 [4] : データ印刷
 [C] : dBASE III plus ネイティブモード
 [/] : 終了 QUIT
 処理する番号の入力 []

①
②

NO.	項目名	NO.	項目名	NO.	項目名
01	在園コード	09	明治村字名	19	研究論文
02	国名	12	史料村郷名	20	地名辞典
03	郡名	13	領家・本家	21	備考
04	荘園名	14	初見年西暦		
05	ふりがな	15	初見年西暦		
06	重複コード	16	出文番号		
07	参考市町村	17	出文番号		
08	町村コード	18	記録類		

検索・編集印刷処理

項目名	[02] 02 国名
選択	[04] 04 荘園名
	[13] 13 領家・本家
西暦	[1001] 年 ~ [1200] 年まで

初見年西暦による範囲の指定。

③

02 国名
 検索項目1 [陸奥, 出羽,]

04 荘園名
 検索項目2 [庄,]

13 領家・本家
 検索項目3 [摂関家,]

初見年西暦 (1101~1200)

検索文字列入力

検索項目に指定できる文字列の数は
 1~3の項目で合計5個以内です。
 又、検索文字は必ずコンマ[,]で
 区切り、文字列の最後にも必要です。
 (例) → [駿河, 伊豆,]

確認 [*]:OK [=]:修正 [/]:中止 [.]

④

OPEN	検索結果一覧	初見年西暦 (1001~1200)	レコード数 = 10件
No. 在園コード	国名 郡名	在園名 庄名	重複コード
1 2740001	陸奥国 桃生郡	本良庄	
2 2740002	陸奥国 桃生郡	小泉庄	
3 2751001	陸奥国 磐井郡	高鞍庄	
4 3201005	出羽国 置賜郡	成島庄	3201001
5 3201007	出羽国 置賜郡	置代庄	3201004・3211001
6 3202003	出羽国 田川郡	小寒庄	
7 3203005	出羽国 村山郡	河江庄	
8 3211001	出羽国 飽海郡	屋代庄	3201007
9 3211002	出羽国 飽海郡	遊佐庄	
10 3211004	出羽国 村山郡	大曾庄	

[1]:編集 [2]:ファイル [3]:フルフ印刷 [4]:必要情報画面 [5]:必要情報印刷 [/]:終了 []

図2 検索の一例

表2 『荘園DB』「庄」の史料初見年、世紀別分類

(1991, 6現在)

地方	国名	総数	～8C	9C	10C	11C	12C	13C	14C	～16C	計
東国	遠江	48	—	2	—	1	15	11	6	—	35
	駿河	44	—	—	—	—	4	4	7	3	18
	甲斐	37	—	—	1	—	11	7	7	3	29
	伊豆	16	—	—	—	—	4	3	4	1	12
	相模	41	—	—	—	—	14	6	5	3	28
	武蔵	135	1	3	—	—	6	9	6	3	28
	安房	5	—	—	—	—	1	—	1	—	2
	上総	25	—	3	—	—	6	3	1	1	14
	下総	41	—	—	—	—	17	5	7	2	31
	常陸	46	—	—	1	—	8	7	5	1	22
	信濃	69	—	2	—	1	45	1	2	2	53
	上野	31	—	—	—	—	5	8	7	2	22
	下野	29	—	2	—	—	8	6	2	3	21
	陸奥	61	—	—	—	—	4	12	14	3	33
	出羽	33	—	—	—	1	9	1	1	1	13
	越後	70	5	1	3	1	27	3	3	3	46
	佐渡	1	—	—	—	—	—	—	1	—	1
計		732	6	13	5	4	184	86	79	31	408
北陸	近江	359	8	5	17	44	35	58	40	28	235
	美濃	146	—	5	2	5	33	26	18	6	95
	飛騨	2	—	—	—	—	1	1	—	—	2
	若狭	43	—	—	—	—	11	14	5	5	35
	越前	132	16	4	8	1	21	46	13	2	111
	加賀	59	1	1	2	—	11	14	7	10	46
	能登	29	—	—	—	—	8	16	1	1	26
	越中	61	12	—	1	2	8	8	12	19	62
計		831	37	15	30	52	128	183	96	71	612

には、8～9世紀に東大寺・西大寺などによる初期荘園の活発な舞台となり、13～14世紀に室町幕府の地盤となったこの地方の性格がうかがえる、2) 一方の「東国」特に坂東諸国には、鎌倉幕府の成立を支えた12世紀の爆発的な開発状況が反映している、3) そしてこの「東国」の中で越後と出羽には「北陸」的な性格が認められる、等々のことを指摘できよう。

勿論これは荘園の史料初見年であって荘園成立期と同じではないし、上記の諸事項は更に個別に突き詰めて証明する必要がある課題であるが、そこでもこの『荘園DB』の貢献する余地は多いであろう。例えば、10世紀以前に成立していた坂東の諸庄が12世紀以後全く姿を現さないのに対し、北陸の初期荘園の中には鎌倉期以降の史料に現れ、中世的に転生したものがあることなども、短時間で簡単に知り得るのである。残念ながら今この問題にこれ以上拘っている余裕はないが、時間のあまりかからないコンピュータによる数的な把握には、歴史研究における課題発見の端緒という役割も期待できるのではなかろうか。

結びに代えて—共同研究機関としての歴博の情報公開の多様化について—

本稿の当初計画では、実際に『荘園DB』の検索機能を使って地域特性などを検討する予定であったが、その作成過程と内容の報告で紙面を使い果たした。しかしこれまで述べたところでも、『荘園DB』が既に実用の段階に入っているという理解は得られたものとする。即ち現在はすでに、修正をともなり使用の時期にある。

歴博公開データベースとしての「日本荘園データベース」作成の全過程を極めて大づかみにみると、1) 基本情報の集積と入力、2) 情報の修正、3) 利用方法の検討、という3つの段階に分けることができようが、現在はその第1の段階を終了し、第2の試用しながら修正するという段階にあり、最終の利用方法を検討する条件もようやく整ってきたように思われる。そこで少し問題を広げ、「日本荘園データベース」の利用問題を中心におきながら、コンピュータを利用した情報公開に関する歴博の課題、その多様な方法とそれぞれの得失について考えて、稿を終えたい。

〔電話回線を利用した公開データベース〕

前述のように、この公開データベースの作成が当面の目的であったし、本年度からそのためのシステム作成作業を始める予定である。大型の歴博ホストコンピュータでは、基本的には『荘園DB』で実行できた検索を、より遥かに早いスピードで、しかも全国的な規模で実現できるであろう。しかし、これまでの公開データベースの経験から推測すると、備考欄に書き込まれた文章の中の単語を検索することは困難かも知れない（パソコンデータベースの『荘園DB』では、絵図のある荘園には備考欄にその所蔵者名などの情報や、鉄のような特殊な年貢物も書き込んでおり、それらも検索対象にできる）。そこではまた、書き込みや修正などが簡単には行えないようになるであろう。従って、今のままパソコン上の『荘園DB』は保持してデータの追加や修正を行い、2年に一度というような間隔でホストのデータを一気に更新する、というような方法をとることになると思われる。つまり、相変わらず基本はパソコン上におかれており、通常は『荘園DB』の方が情報の質が高いという状態になるであろう。

〔来館者を対象としたコンピュータサービス〕

歴博のホストコンピュータは今年更新の時期を迎えており、その新しい機種では、従来はなかった画像処理能力が加えられ、情報を地図上に表示する機能も備えられる予定という。検索結果の地図上への表示という前述の狙いが実現できるわけである。しかしながらそれは、少なくとも当分の間は、電話回線による「公開データベース」の対象とはならないであろう。とはいえ地図上への表示は、「日本荘園データベース」に限らず、既に公開されている「貿易陶磁データベース」や「旧高旧領取調帳データベース」などでも望まれ試みられている課題なので

ある。

歴博では公開データベースの来館者サービスもまだ実施されていないために、機器の点でも技術的に検討を要する問題もあり、企画展などの機会に実験的に始めるのが妥当と思われる。1993年春に開催される『荘園絵図展(仮称)』では「日本荘園データベース」を公開する予定であるが、まずはこの時期を目標に、地図情報との結合という課題を含めて、来館者を対象としたコンピュータサービスの方法を検討したいと考えている。ついでながら、記録類の全文検索においても、この来館者サービスの必要性が考慮され始めている。

〔パソコンデータベースの利用と普及〕

上述のようにホストコンピュータの「日本荘園データベース」が動きはじめても、パソコン上の『荘園DB』は維持され、その情報は追加・修正をし続けなければならないのであるが、学生に対する演習や論文指導など、大学の研究教育の場はその追加・修正のデータを得る重要な機会と推察される。つまり「日本荘園データベース」に新しい生命を吹き込んでいくためには、電話回線を利用した公開だけではなく、時には積極的に、『荘園DB』を研究教育の場に持ち込んで利用を促すことが有効であろう。そのためには、パソコンソフトの権利を損なわないための配慮なども当然であるが、市販ソフトの中でdBASEIIIなどはかなり普及している。最大の問題は、必要に応じて自家製の情報を盛り込める便宜さをもち、簡単にコピーも作れる、というパソコン情報の特徴による予想外の変形と普及の危険を如何に避けるか、ということにあると思われる。こうした問題は、歴博ではまだ殆ど議論されていないが、歴博で開発したデータベースのソフトとデータの権利保護の問題と共に、早急に検討を要する課題であろう。

〔CD-ROMの利用〕

『荘園DB』のようなパソコンデータベースは、利用者が自由に書き込み、必要に応じてシステムを変えることもできて、小回りがきく。しかし現在の『荘園DB』には、参考市町村によってその位置などを表示する機能は備えていないし、その計画もない。その点で対極的なものはCD-ROMの利用であろう。現在の『荘園DB』は、システムを含めても20メガ程度であり、『荘園文献DB』を含めても、40メガの通常のパソコンハードディスクで対応できるが、CD-ROMには500メガの収録力がある。従ってこれは、文字情報である現在の『荘園DB』にはもったいないが、画面情報や地図情報という大容量を必要とするデータベースには適している。そしてそのデータは、パソコンデータと異なって、変形や修正が困難であるが、製造は通常100枚単位で大量需要に適している。現在はまだCD読みとり装置が普及していないが、将来は歴博のサービス業務のひとつとして、あるいは歴博振興会などと提携して、利用を検討する価値があると思われる。そうした際には、地図情報を盛り込んだ「日本荘園データベース」は、考古学的発掘成果を盛り込んだ他のデータベースと共に、試作の対象となりうるであろう。

以上、コンピュータの原理も知らない素人が勝手なことを書き並べた。専門家の目でみればおかしな誤りや抜け落ちた問題も多いであろう。ご教示を切望するものである。

私が歴博に採用され、初めて館長室を訪問した際、館長から「歴博では客商売です」というお話をうかがい、妻とともにそのいさぎよさに感服した覚えがある。この「日本荘園データベース」作成の作業に対して私は、サービス業務として取り組んだつもりであるが、いささかのめり込み過ぎた感もある。しかしともかくも、ほぼ予定どおりの期日で仕事は進み、終結を見通すこともできるようになった。ひとえに館内外の厚い理解と協力のおかげである。なかでも試行錯誤の多い私の計画に対して、根気よくつきあってくださった歴博共同研究の諸氏、および種々の便宜を計ってくださった代々の用度係をはじめとする管理部の方々に、特にお礼を申し上げたい。

〔註〕 歴博共同研究「日本荘園データベース構築の基礎的研究」のメンバーは、次の19名である（敬称省略・順不同）。

工藤敬一（熊本大学文学部）・有川宜博（北九州市立歴史博物館）・坂本賞三（神戸学院大学人文学部）・岸田裕之（広島大学文学部）・小山靖憲（和歌山大学教育学部）・泉谷康夫（奈良教育大学教育学部）・稲本紀昭（京都女子大学文学部）・稲葉伸道（名古屋大学文学部）・岡田隆夫（東京大学史料編纂所）・海津一郎（学振奨励研究員）・田中稔（本館情報資料研究部）・八重樫純樹（同）・西澤奈津子（本館歴史研究部）・小島道祐（同）・福田豊彦（同）

（国立歴史民俗博物館 歴史研究部）

Invitation to the "Data Base of Japanese Shōen (荘園)"

FUKUDA Toyohiko

The aim of the "Data Base of Japanese Shōen" is to collect principal information on "Shōen" all over Japan, and to make possible the retrieval and display of data in a short time by computer. The "Shōen" dealt with in the data base include Shō, En, Mikuriya, Maki, Hō, Beppu, and so on, and their ages are not limited to the Medieval Age. Listed "principal information" include 19 items such as name of province, name of district, principal historical source, first year seen in historical materials, supposed location, and so on.

At first, data were accumulated as a "Shōen Data Base" run on a personal computer, and collectively sent to the host computer in the National Museum of Japanese History so that they may be published as "Data Base of Japanese Shōen". After completion of the data base, data may be retrieved and supplied through telephone lines, and may be also used for exhibitions. The preparation work started in 1987, and input of the "Data Base of Shōen" was by and large finished in 1990. At present, modification work is under way, while the data base is being used experimentally. It is scheduled to be completed in 1993. The total number of "Shōen" stored in this data base stands at 7,947 at present, and will amount to 8,500 on completion in 1993. The number of Shōen included in the "Shōen Shiryo" (=Documents on Shōen) edited by SHIMIZU Masataka is 5,823.